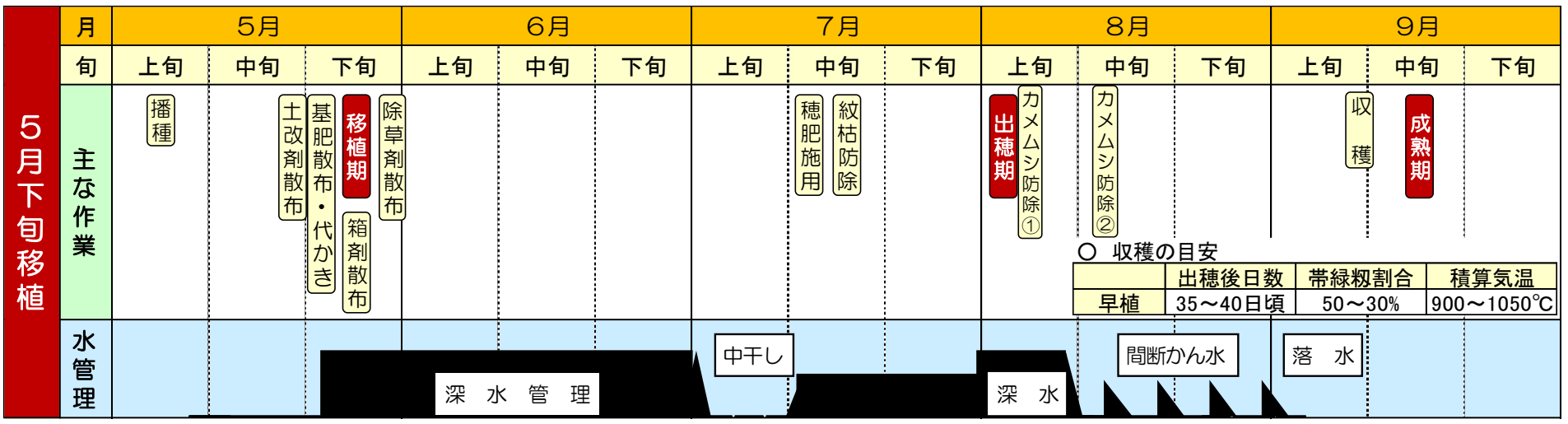
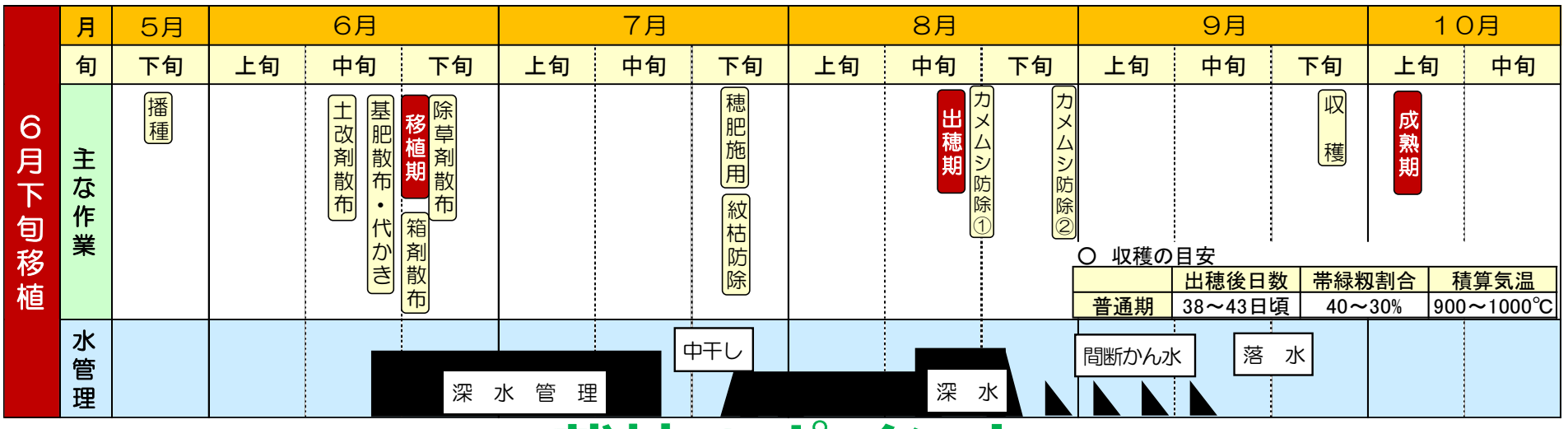
彩の国
埼玉県

極良食味を目指した
彩のきずな栽培暦

主な作業と水管理





栽培のポイント

土作り
○ 堆肥、ケイカル等の土壌改良資材を積極的に投入する。

移植期
○ 地域慣行の移植時期とする。

移植方法
○ 坪当たり５０～６０株植とする。極端な疎植は高位高次分げつの多発、密植は高温時に過繁茂→凋落型の生育となる危険性が高まるので避ける。

基 肥
○ 施用量は通常より少なめの窒素成分で4～5kg/10aとする。初期分げつを確保しやすく、遅発分げつが発生しにくい側条施肥も有効である。この場合は施肥量を4kg/10aとする。

中干しまでの水管理
○ 遅発分げつの発生を抑えるため、できる範囲で深水管理とする。

中干し
○ 遅発分げつの発生を抑えるため、有効茎(450本/㎡程度、50株植で株30本、60株植で株25本)が確保できたら早めに中干しを確実に実施する（5月下旬植：7月上旬頃、6月下旬植：7月下旬頃）

病害虫防除
○ 病害虫防除を的確に行う。特に紋枯病は登熟に悪影響を与えるため防除を徹底する。

穂 肥
○ １穂籾数の増加を抑え、粒厚を厚くするため、通常よりやや遅めの出穂前20～15日頃(幼穂長2～15mm程度）に窒素成分で1.5～2.0kg/10a程度を施用する。

登熟期間の水管理
○ 根の活性維持のため、出穂後1週間頃から収穫10日前頃まで、間断かん水を励行する。

収 穫
○ 収穫適期内で早めの収穫で食味の向上が期待できる。
上表を参考に、収穫時期が近づいたら、定期的に籾水分を測定し、25%以下になったら直ちに収穫を行う。

乾燥・保管
○ 胴割れの発生を防ぐため、乾燥機に張り込み後、12～24時間程度、通風を行った後、火を入れ、できるだけゆっくり乾燥を行う(乾減率1%/時以下）。
○ 水分14.5～15%とし、絶対に14.5%以下にしない。
○ 籾すり後は食味低下を防ぐため必ず冷暗所に保管する。

秋 耕
○ 稲刈後、秋の間に稲わらや籾殻、稲株をすき込む。
○ 秋耕を行うことで冬の間に稲わら等の分解が進み、水田の肥沃度向上や、次作水稲のガス害や窒素飢餓の防止となるとともに、温室効果ガスであるメタンの排出が削減できる。

埼玉県のマスコット「コバトン」と「さいたまっち」

令和7年3月作成